

祖国の灯、復活の基

牧師 山本 護

そういえば韓国の知人が指差して、「コノ花ハ我祖国ノ山ニタクサン咲イテイマス」と言っていたな。拙宅の庭にあったそんなレンギョウの脇枝を、機本かを引っこ抜いて八ヶ岳伝道所の地境に植えておいたら、この春、奔放な株になって好き勝手に咲いていました。すると受難週直前の主日に雪がふらふらと舞い戻って来て、無彩色の風景の中でレンギョウの花は明滅する灯のようになりました。



たいして気にもとめなかったレンギョウの花に雪が降りかかり、その様にどういふわけか立ち尽くして『猪飼野詩集』で知られた金時鐘(キム・ジヨソ)の言葉を思い起こしました。「在日もまた、すぐれて一つの朝鮮だ」。その実感を金はさらに詳しく書いています。「私がすでにすぐれて一つの朝鮮である<在日>の朝鮮人であるとき、私は北からも南からも規制を受ける何もも持たない(『「在日」のはざままで』)」。

北でも南でもなく、また日本でもない「在日」という寄る辺なさと自由さを私なりに理解していたつもりでしたが、明滅するレンギョウに打たれて、金の言葉の「コク」を初めて味わえた気がします。言葉が頭から胸に落ち、胸から肚へすうと下がって。

女たちは復活したキリストに邂逅し、語りかけられる。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに出会うことになる(マタイ28:10)」。そして弟子たちは、ガリラヤの山で復活のキリストと出会います(28:16~17)。やがて弟子たちはエルサレムでキリストの体として教会を形成しますが(使徒1:13~15)、その基には人間イエスと出会い、復活のキリストと出会った北方の故郷がありました。

金時鐘にとっての「在日という朝鮮」は、故郷ガリラヤの山なのかもしれません。同調圧力が強い無彩色の日本に覆われても、レンギョウのように淡々と己を明滅させている。しかも北からも南からも自由な、孤独で懐かしい祖国の灯として。

教会形成は地域に根ざす、というより世界のどこでもないガリラヤへ帰郷し続けること。とりわけ日本においてキリスト者は相当に少数なので、在日とは別の意味で、寄る辺なく自由な異邦人として居やすい。このことは幸いであるように思います。Ω